

題目 社会的痛みを自分で癒せるか？－排斥場面における情緒的サポート効果の検討－

氏名 山縣豊樹

指導教官 高橋伸幸

本研究では、社会的排斥下での情緒的サポートがどのようにストレスを軽減・抑制するのかを明らかにすることを目的とした。社会的排斥とは、仲間はずれにされるような状況であり、社会的動物である人にとっては生存の脅威となりうるものである。本実験では、他の多くの実験 (e.g., Onoda et al., 2009; Nishiyama et al., 2015) と同様に、社会的排斥を実験室状況で再現するために、サイバーボール課題という簡単なキャッチボールゲームを行った。サイバーボール課題では、はじめは参加者もキャッチボールに参加するが、途中で突然、ボールが回らなくなることで、参加者に社会的排斥を経験させた。そのような状況下で情緒的なサポートがどのように効果を発揮するのかを、Onoda et al. (2009) でのモデルを参考に検討した。このモデルでは、ストレスが疾病に至るまでの間にストレスラーが自分にとって有害かどうかを評価する過程が存在しているとしている。本研究においては、このストレスラー評価の過程以前に、ストレスラーに注意を向け、検出する段階があると考え、その検出段階に情緒的サポートがどのように効くのかを検討した。さらに、本研究においては、自分自身によって自分自身をサポートする“自己サポート”の効果についても検討した。現実世界では他者からの情緒的サポートが得られない場面も存在する。そのような場合に、ある程度のストレスを自分自身でケアできるならば、これは非常に意義深いものであると考えられる。本研究においては、ストレスラーとしての社会的排斥の手がかりへの注意を、Kawamoto et al. (2013) に基づいて、事象関連脳電位 (event-related brain potential: ERP) の成分であり、社会的排斥の手がかりに対する注意を反映すると考えられる P3b を用いて検討した。その結果、情緒的サポートが社会的排斥の手がかりへの注意を向きづらくするということが、および“自己サポート”が他者によるサポートと同程度の効果を持つということが示唆された。この情緒的サポートの効果は、ストレスラーの評価過程への影響を通して、ストレスラーの検出段階に影響したものであると考えられる。また、“自己サポート”は他者によるサポートと同程度の効果を示したが、心理尺度との相関において他者サポートと自己サポートの相違が見られたことから、この2つのサポートは質的な違いがあると考えられる。今後、主観的評定やfMRIなどの他の指標を用いることで、この質的な違いについても検討していくことが課題である。